群書類従　三百三十二

和書門
類
號 九五九五
函 二〇四
架 八
册 六七〇

内閣文庫
和書
類
號 九五九五
册 六七〇
三
二四函
架 一九

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670 (416)
函號 214 39

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

元老院図書記

群書類従巻第三百三十二　検校保己一集

紀行部六

いさよひの日記　阿佛

むかしかへのなかよりもとめいてたりけんふミの名をハいまのよの人の子ハ夢はかりも身のうへのことゝはしらさりけりなみつくきのをかのくすはらかへすかへすもかきとむる跡たしかなれとかひなきものはおやのいさめなりけり又かしこき人をすて給ハぬまつりことにももれちうしんのよをおもふなさけにもすて

孔安国孝経序云魯共王使人壊夫子講堂於壁中石函得古文孝経云々　万葉十二　水茎之岡乃田葛葉緒吹變而知児等之不見頃鴨

らうしもわらはすからぬ君ひとりおはしけるまとおほしく
東明の文はくしもはらはてなかきのうたまへこそ
やるかたなくかなしみにたへかねてむかしをおもひいてゝくれはやすかたと
うらみのかくれたるまをすくれぬるをはかるすゝむるたつか
あまとゆゑ人のやあらん日におもひはてゝたのまれいへと
泣らくしおもふをものゝをちのかくらるゝをとかけは
かへてせんはおさめをはるとやかてなるものとなり
ありかたきこのみちのみちまてそろしきすくしとりき
あかりさて文集をとえる婦人のためしおかりまとこ二
かさよ八勅をうちて世に小町えあるとつかきに入てあらは

なにおもふことやけりゝんそれおとはしもあつさかりて
このうちのをのこともうちてちのそのかふかくとやさと
いかなるえにのあまたなむたゆりまことをあまとと道
とあとけよきなれくてめつちの谷をとへとそ姫の策
跡かをむすひをゆきてかるりのかみのみちをゆへ君くと
さしをてめらせしかは経とふのまれとりし火をなすを
侍ともあそとあるむおやこの命もを縁ともかなえ
をあらそふ水に月をうつしてあやうくんかゆなり
給ふそしてはまなくなふまくいあすふらんかりをぬ
身ひとつはやまとくさひすつまとなるなかさふんのやと

按将軍執権次第。将軍惟康親王。執権相模守時宗。

古今雑下
文屋のやすひでてみかハのそうになりてあがた見にハえいでたゝじやといひやれりける返ことによめる
小野小町
わびぬれバ身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

後撰冬
よみ人しらず
神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

さすがに身のひとつくたをとつりうろ恨ハやらんかたなく
てさてもあつまの亀の鏡にうつさバくもらぬ影
もやあらハるゝとせめて思ひあまりてよろづの
はゞかりをわすれ身をえうなきものになしはてゝ
ゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひ
なりぬるさりとて文屋のやすひでがさそふにもあらず
すむべき国もとむるにもあらずころハ三冬たつ（建治三）
はじめのさだめなき空なればふりみふらずみ時雨
もたえずあらしにきほふ木の葉さへ涙とともに
みだれちりつゝことにふれて心ぼそくかなしけれ

古今雑別　源さね
人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなん

為相卿。公卿補任云。文永二四十三。従五下。三才。同五八廿四従五上。同八四一侍従。同十二正十八兼美作守。建治元八十六復任。弘安二八十二正五下。兼輔。改ー相。同六五廿九復任。

ど人やりならぬ道なれバゆきうしとてとゞまるべき
にもあらでなにとなくいそぎたちぬめかれせざりつる
ほどだにあれまさりつる庭もまがきもまして
と見まはされてしたはしげなる人々の袖のしづく
もなぐさめかねたる中にも侍従（為相）大夫（為守）などのあながち
にうちくつしたるさまいと心ぐるしければさまざま
いひこしらへ閨のうちを見やれバむかしの枕さへを
かはらぬを見るも今さらかなしくてかたはら
にかきつく

とゞめおくふるき枕の塵をだに我たちさらバたれかはらはん

代々にかわりを追ゐるこのはらしとも乃おもくうきな
とてあさましぬりさうとえりしてめぐく侍従乃
かたへをもふるとてうきさろへ為る斗
和哥の浦にかきとめたるかの海草を昔のとぞとみな
阿かりしこよなきかるか須磨へてあるか読をおくりて
是をとりんでくらうの人のうちにいとちとつゝかり
淡路によきはふそれにし藻塩草かたみにしよみにきて
海らはよし哀さりとは須千鳥一つくなるめ読をそれなる
きめつへりとといつとおとなしいままいんやもくあいまゝなる
みちき聞故人よこゝろをとうてまゝりめくて文ともあしれ

姫大夫乃へくらとりく須磨をもてはるとぞめりとな
ら紀なりけるあかのはにおもひあきりてきすとひ
志てさろ紙を見れハ
大海くとりてぞ須くあさくの家にいふとなきの家絵 すりめん
とこの紀の前あるを紙にあるちそこにあつをりつおもの
めくるいのうきへり
淡くろとなきくいろとしかくの海り志
こ数きなるの浜とふよふるしいくれ阿らか乃見しつくく 源兼
ちみきとておりつあかるまていたけれとそのいとおもみ
まてろくとこれまつるいとをとるし文かきろ色ともの

あくふの三瀬ハかをし藤衣ぬかりて涙らゆくへるを（と）
といひをいみし瀬のきらすまとはつくよもれいひ
まゆらも涙を活たく上蔵すらあさりのさらみく（廖融）
山ふしはくけへらく見すら跡さひのみちかれとを
ろし道はまらむとて出ぬくるめ哉との人まを
又ましらへさらんやハとてうさはく
ぬらそふる姫かうる旅衣てこふぬの心親のまかゆハ
むすめのこハゆまくこそありてひとらあくはからう
ゆらくかとの女院（新陽明）よさ姫らひ法く院（亀山）乃武なとて
さらむまき遊行斗りしてむつらひを滿ならし（しイ）

古今離別
をのくあかるゝこゝろのくはずかよまちのろ時ふえくのよめる
あらちのの初やのまわりとおひそふるふくらくハせきこゑとへめて
一代要記云。新陽明門院位子建治元年四月日院号。関白従一位基平公女。亀山院女御。

ていとおしくおもへすまひハ定乃法のさたしさうとこの
ねくやなくついては侍従大夫のもとへくとして
と急ぎよしをこ滿のよかさつきく拙くよ
きみをとも関白殿のめ古宗ふ浅ろかると思ふ
すみをはうえし御遣の御乃もとあ滿やうふいとあつ
りけさて哥乃返し小めて
思をくらてめハ古活とれ雲かとれしや満となき
こ袖をあるいハ河と乳さらぬをの前乃ちうまれくうさつく
如るとの川いてととと滿しくれとおもや乃くよいハあへく
道へり姑わかゆるまれうほ源氏あ河あかつさのとくなハ

くてもいかゞとてつれなくふりすてつ粟田口と
いふ所より車はかへしつほどなくあふさかのせきこ
ゆるほどにも

さだめなき命はしらぬ旅なれどまたあふさかとたのめてぞ行

野路といふ所こしかたゆくさき人もみえず日は暮かゝりて
いと物がなしと思ふに時雨さへうちそゝく

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれて行先とほき野路の篠原

こよひは鏡といふ所につくべしとさだめつれど暮
はてゝゆきつかず守山といふ所にとゞまりぬこゝ
にも時雨猶したひ来にけり

いとゞ猶袖ぬらせとや宿りけむまなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけりいとくるしくてうちふしぬいまだ
月のひかりかすかにのこりたる明ぼのにもる山を出
でゝゆくやす川わたるほど先だちて行人
の駒のあしおとばかりさやかにてきりいとふかし

旅人はみなもろともにあさたちて駒うちわたすやすの河ぎり

十七日の夜はをのゝ宿といふ所にとまる月出て
山の峯に立つゞきたる松の木のまけぢめみえて
いとおもしろしこゝも夜ふかききりのまよひにたどり出つ
さめが井といふ水夏ならばうちすぎましや

古今二十
みのゝくにせきのふち川たえすして君につかへん万代まてに

とみるにかち人ハ猶たちよりてくむめり
むすふ手ににこる心をすゝきなはうき世の夢
やさめかゐの水とそおほゆる
十八日みのゝ国せきのふち川わたるほとにまつおもひ
つゝけらる
我子とも君につかへん為ならてわたらましやはせきの藤川
不破の関屋のいたひさしはいまもかはらさりけり
ひまおほき不破のせき屋ハこのほとの時雨も月もいかにもるらん
関よりかきくらしつるあめ時雨にすきてふりくらせは
みちもいとあしくて心よりほかにかさぬひのむまやと
いふ所にとまりてねさめしてよめる
旅人ハみのうちはらふ夕くれの雨にやとかるかさぬひの里
十九日又こゝを出てゆくよもすからふりつる雨にひら
のとかやいふほとみちいとわろくて人かよふへくもあらね
ハ水田のおもてをそさなからわたりゆくあくるまゝに
雨はふらすなりぬひるつかたすきゆく道に目にたつ社
ありて人にとへハむすふの神とそきこゆるといへハ
まもれたゝ契むすふの神ならハとけぬうらみにわれまよはさて
すのまたとかやいふ川にハ舟をならへてまさきのつな
にやあらんかけとゝめたる浮橋ありいとあやふけれと

なれども海こそ川つゞきなりといふとみえてなく/\
河のきらけきハ
此てうちれ海さくハあまたかのゝへめにさふさせうるん
かられ世の中さしとみつきしくうるやすくと浮舟とうれ橋にて
こきなりひつらうるゝる又一[?]とりかやし給ふをすくとて
つき名をへ[?]のめやうてこうる法[?]とおもう給へ
廿日にくる[?]まありとい[?]むさや[?]ねくとれ[?]みち
さうてあつきのうやへ海つらく伝とうハてうれつさ
てあてまつる事
行るをよわうふを鳴海さくいふ[さしイ]西ひく汐し神のよふく

あるこれうらハ浦のを過てすハ拙[?]しく[?]神しらん
み川沙の[?]にてそさび[?]鳴海って神やにハ遣とみるあ[?]て
南風に神の[?]よ海[?]まんうち行さ[?]のさ[?]うあります
れるそのうさとすくるふ[?]ひのやと[?]遣いはそうあ
く[?]るゝはり行しを渡[?]るいと[?]うくさうち
てりをさへかあるらん代して
漢[?]電て[?]世中に[?]とめむとハさくさうしと
すう川のうらふてそあうと[?]しうとみやこふうとよ
なれそしとかしとあれハ[?]らんふをあり[?]り
さとうむ紫[?]とハあ[?]て我住[?]の[?]なるうと[支]

二むら山をこえて行は山も野もいと遠くて日も
くれはてぬ
はる〳〵と二村山を行すきて猶すゑたとる野への夕やみ
八橋にとゝまらんといふくらさにはしもみえすなりぬ
さゝかにのくもてあやうき八橋を夕くれかけてわたりかねつる　玉葉集
廿一日八はしをいてゝ行にいとよく晴たり山とほき
はら野をわけ行ひるつかたになりてもみちいと多き
山にむかひてゆく風につれなき紅葉ところ〳〵くちはにそめ
かへてけりときは木とも立ましりて青地のにしき
をみる心ちす人にとへは宮ち山といふ

時雨けり染る千入のはてはまた紅葉の錦色かはるまて
此山まては昔みし心ちするにころさへかはらねは
待けりな昔もこえし宮路山おなし時雨のめくりあひつゝ
山のすそ野に竹のある所にかやゝのたゝ一つみゆる
いかにして何のたよりにかくてすむらんと見ゆ
ぬしや誰山の裾野に宿しめてあたりさひしき竹の一村
日は入はてゝ猶物のあやめもみえぬ程にわたうと
かやいふ所にとゝまりぬ
廿二日のあかつき夜ふかき有明のかけにいてゝ行
いつよりも物かなし

すみわひて月の都を出しかとも紀行に忘れぬ名所の哥
古今集拾ひ遺ろこともなる〈名所の月さへ〈うさ記
ぬらといふをきゝて

旅人の都にかへりや知らん須磨の浦に見る有明の月

たのしみをさへ見るらん須磨の浦の松に住む鶴いと知りて濱のを
あまりく松の影をきゝすくる涙いときこえ

我面めや涙をたりしの濱なりん袖の湊の波とやすまで
いとさらさしすさ紀ようろうさとのむきたつるいふ也
いふとうなるまたり

志ら濱よすま風ならる志ほつとり草ともよのふなようき
てなし

志賀なりをまちみなきをはなちをめといふなれと知れく
さひちくひく水の底へといる岩の上りをなるり

いかなる淵瀬の岩をよるか波の身をよそす神よ
こころしそ

志らひハ知く濱の志ほくといふと志ろよき濱なることのゆとと
須の松わるくの名いそ濱松とそいひし志るしとなり
ちうらの名をなをとすむ所なりすまし人の松をとりき
をさ濱しくさひおらまて文めくり所ひくてといる命れお
ととく〈をく所く事なり

濱松のかりぬかをは紙落させてみし人有に昔をそとよ
うは世よみし人のこむ事とよひいてく所ひしらぬ

西行法師御詞云東のかたへ修行しけるに天竜のわたりにて舟にのりたれは武士おりよとて鞭をもちてうちけるにかしらわれてちなかれてそなん西行うらみつゝひてうけつるよしを みえて物かたりける

廿三日天中わたりといふ舟にのるに西行かむかし
もおもひいてられていと心ほそしくみあはせたる舟
たゝひとつにておほくの人のゆきゝにさしかへるひまも
なし

　水のあはの浮世にわたる程をみよ早瀬の小舟棹もやすめす

こよひは遠江みつけのこうといふ所にとゝまる
里あれて物おそろしかたはらに水の井あり

　たれかきてみつけの里ときくからにいとゝ旅ねそ空おそろしき

廿四日ひるになりてさやの中山こゆことのまゝとかや
いふやしろのほと紅葉いとおもしろし山
かけにて嵐もおよはぬなめりふかく入まゝにをち
こちのみねつゝきことやまににす心ほそくあはれなり
ふもとの里きく川といふ所にとまる

　こえくらすふもとの里の夕やみに松風おくるさやの中山

あかつきにおきてみれは月もいてにけり

　雲かゝるさやの中山こえぬとは都につけよありあけの月

河音いとすこし

　わたらむとおもひやかけし東路にありとはかりはきく川の水

廿五日きく川をわたりてゆくけふは大井川といふ河をわたる水
いとあせてきゝしにはたかひてわつらひなしかはら

いくさとゝかやいとはるか也水のいでたらんおもかげおしはから
るゝ哉

思ひいづる都のことは大井河幾瀬の石のかずもおよばじ

宇津の山こゆるほどにしもあざりのみしりたる山ぶし
ゆきあひたり夢にも人をなどむかしをわざとまねび
たらん心ちしていとめづらかにをかしくもあはれにもやさ
しくも覚ゆいそぐ道なりといへば文もあまたはえかゝず
たゞやむごとなき所ひとつにぞおとづれきこゆる

我心うつゝともなしうつの山夢にもとほき都こふとて

蔦かえでしぐれぬひまもうつの山涙に袖の色ぞこがるゝ

こよひはてごしといふ所にとゞまるなにがしの僧正
とかやのぼるとていと人しげしやどりかねたりつれど
さすがに人のなきやどもありけり
廿六日わらしな川とかやわたりておきつの浜にうち
いづなく／＼いでしあとの月かげなどまづおもひいでらる
ひるたち入たる所にあやしきつげのをまくらあり
いとくるしければうちふしたるにすゞりもみゆれば
まくらのしやうじにふしながらかきつけつ

なをざりにみるめばかりをかりまくらむすびをきつと人にかたるな

くれかゝるほどきよみがせきをすぐ岩こす波のしろききぬ

新古今羇旅　定家朝臣
ことゝへよおもひおきつの浜千鳥なく／＼いでしあとの月かげ

白氏文集。縛戎人云。朝飡飢渇費杯盤。夜宿腥臊汚枕席。

續古 羇旅
安嘉門院右衛門佐

とうちきするやうにみゆるいとおかし

　清見かた年ふる岩にことゝはむ波のぬれ衣幾かさねきつ

ほとなくくれてそのわたりの海ちかきさとにとまりぬ
浦人のしわさにやとなりよりくゆりかゝるけふりいと
むつかしきにほひなれは夜のやとなまくさしといひけ
る人のことはもおもひいてらるよもすから風いとあれて
浪たゝ枕のうへにたちさはく

　ならはすよよそにきゝこし清見潟あら磯浪のかゝるねさめは

ふしの山を見れはけふりもたゝすむかしちゝの朝臣に
さそはれていかになるみの浦なれはなとよみしころとをた

さてもかくれいるまかることの浦なとハ公くまハ見えさるらん

あふみの国まてハ見しかハふしのけふりのすゑもあさ
夕たしかにみえしものをいつの年よりかたえしとゝへ
ハさたかにこたふる人たになし

　誰かたになひきはてゝかふしのねのけふりのすゑのみえすなるらん

古今の序のことはまておもひいてられて

　いつの世の麓の塵かふしのねを雪さへたかき山となしけん

　朽そしなからのはしをつくらはやふしの煙もたゝすなりなは

こよひハ浪のうへといふ所にやとりてあれたるさま
さらにめもあはす

廿七日あけはなれてのちふし河わたる朝川いとさむ

しかそふれは十五せをそわたりぬる

さえわひぬ雪よりおろす富士川の川風寒し衣手の森

廿六日いとうらゝかにてたこの浦にうちいつあまとも
のいさりするをみても

心からおりたつ田子のあま衣ほさぬ恨と人にかたるな

とそいはまほしき伊豆のこふといふ所にとまる
夕日のこるほとみしまの明神へまいるとてよみてたてまつる

あはれとやみしまの神の宮はしらたゝこゝにしもめくりきにけり

おのつからつたへし跡もあるものを神はしるらんしき嶋の道

尋ねきてわかこえかゝるはこねちを山のかひあるしるへとそ思ふ

廿八日は伊豆のこふをいてゝはこねちにかゝるいまた夜ふか
かりけれは

玉くしけ箱根の山をいそけともなをあけかたき横雲の空

あしからの山は道とをしとて箱根ちにかゝるなりけり

ゆかしさよそなたの雲をそはたてゝよそになしぬるあしからの山

いとさかしき山をくたる人のあしもとゝまりかたし湯さかと
いふなりからうしてこえはてたれは又ふもとにはや川といふ
川ありまことにはやし木のおほくなかるゝをいかにと問へは
あまのもしほ木をうらへいたさんとてなかすなりといふ

東路のゆさかをこえて見わたせはしほ木なかるゝはや川の水

ゆさかの浦よりて日くれかゝるにおもはぬ海のつらにまかせ
しほ浦の木しげきまでみちくれは海つらといひけるところ
とくいそかるゝ人もありあまの家のさまそある
何某かすむかしの里の名をも岩浪のよするなぎさや海
しまのこの川といふもあそこかしこにたえかはるもあらひかさぬ
といふ所よりこの海のほとりは海くへいることとりふおり
廿九日さらくわいて濃路をわたくとりあるのさまかるを
はらいとふるき月いそあり
浦路はるくわそさ成波あよりおてまつするまくの月
あはらにかせのへる浪乃とへまそかりては あつる

浦のつらに見え沢なりぬ
あふに毎清行さるは成みをしも浪のうちに浦乃細崎
みやこをはなく侍さまいりてめしなは成暮のはとちゝして
立ちまよふとらむ絶をはこきはなし昔見人乃ひかとこそは
あつくほくすむ所くすりのやかりつけはらにふる浦とさ
山のとみて見いとあらし山寺乃かくりゆるとまかくめとふる
極樂寺
本寺にて浪の音松のきをきゝてすわ乃をとけきはいつるゝ
あはれつゝるもほと行も川の山すくゆさゆも人ゆ
しらものるよらのこゝろ有めにゝしも人乃恨に
たしかなるそらにつきてありし返しとぞいひて

常盤井相国實氏公一女。後嵯峨院中宮。後深草。亀山両院母后。

藤衣殿とうへてうけの山志くれぬひまをさしてかつらん
ゆふかけくもかくれ出しいさよひの月やをしれぬうさなる
哉とといてるとい秋九月十六日なりしかはいさよひの月とね
わしめしかもと是さりにかゆやとゆとやさしくゆくまにかそ
たくけ山遊事つかはとそ文紀とね
めくりゆふ哀秋そめのむゆくわれくるかられかいさよひの月
さ紀のうひやう為教のその御女姞子よむ人すくちらく撰
かるとねひく入給へりちなくのおんの権中納言とさこね
姞子のとせへ朔日中ちるしゅいやや道のおこのおかつ
りちさかとそと浮遊給へる文り

後高倉院姫宮。四條院准母。

もねくとさひとそ出も藤衣殿志らすかとやいかりしと
遊し小
いさひやも露をも時雨もつ行まて山路かちし袖の露やを
母せうとの為兼のため君をかなしさ浦よおおつるするすねと
りわらく
古くハ時雨よみちし藤衣まくやいとくさそ浦さるらん
りへし
藤衣浦のとほえて秋なつさしふらすかもの霜かかりそよ
式乾門院利子のむねんのころけよのときとねるくこりれ大政大臣通光
内侍女とまいても続後撰よりうちつけ紀一つさひえてさの歌

後高倉院姫宮。
後堀河院唯母。

しゐてうらみなふにも猶あまりしかばたよりある人につきてはるゝをも
かくまであくかれそめぬる身はさてしも安嘉門院[邦子]へまゐりてさぶらひし
あけなはまたいそぎ立しあかつきにまかりしに白河のへ[安嘉門院御在所]
まかりしかどまたさらにかはりけるのちぞ
あらぬさまなるこゝちしてかへらむかたもなくおぼえ
ほいなくしらぬ人のみおほかるをはづかしきさまのなげき
かくなくてもなほつれなきをいかにせんとおもひさだめかね
はかなく
消かへり露もまだひぬ袖の上に雪ふるそらに嵐ぞふく
あとこそかへりみられて涙に道も見えずなりぬ

らうがはしき物ならむにはまかりて十二月廿二日の
ほどにまかりけるにさしもあらぬ霜の
夜の中のあかつきもかくれがたくて人やまたかへらむと
二月ばかりは事のついでにもおぼつかなくて
ひとりあはれなるさまにておぼえ
ちかくにまかりけるにもみちの道のほどの
まだとほきにつけてもあはれなるにいでゝ
ひとり袖やぬれけむとわがこゝろにもあらで
さてもあはれにてよりもしかるべきにはあらで
かきくらし雪ふる空のけしきにつけても

とあまたゝびいひ又あつ見はなれぬとわかるほとゝぎすかくれ
とまれる
かゝるなかにもしらん膝夜半の見はなかなかもなくなくなみだを
暁あかつきにはわかれてもすゝおきぬるを枕のうへなく
井ふかきよ海をそすくあかつきにはたのまれしわかれのこゑに
おきたりし人こそ此事はかくありとやるかたなきは御涙を
たきりくさきさまにて今あらはれのこゝろをつゝきける
秋色すみ波色ふかくもとさつとせはすみ風の福おさまりて
又おもひし海ふかく古き見る恋しのみそとしとかあまくく
みな色をとめくまりつゝそいふかねかそのなみしくしかへ
つくあかりめく
はるかにふりあふぐやくすむひかり色ながめやりつ里人ある人
わたりてそのそとくいひさうらんくらひとのふとかりしさかりてそ
きえぬのちそ
又つきとみるに浪のうつるに浪ちる風はさわかしくて
そのあたりをみれば中のみなみの御袖ともあしく人のうへなり
今は三位入道とかやおほしせさらんとかくさらりてくださると
なひなる人なりそめとくきみのまえもめぐらしほや
くとある近衛さまくまうきつきて人ちかよる浪の海
くこゝやこゝろも浦うらかたにあまつくすと嘆きしくりかへ
古今巻三 友則
ちぎりえへの梅の
あふ海はあまを
人とふめいひおもひ
すそあらる

ゆ縁ともなかりし須磨浦は中く神よ波のうきしと
此人を安きめ心をよそにかけしおもはれつゝ海をくすりとたえ
まてなほひとつらねくうきたなるもとはくへ返しを思ふ
なとすく年月をへて春は月をなかめのすゝしめてたるあらは
給ひのおもかくしき谷の戸のあかつきまてはなくらしぬ
のくろ縁あまきをあたらの道をきてかひなき事をまの音
たえのひとつにむかしの夜しき月をみしを見こゑやなさけ
そちらはかなさつきをなかむる人あまねくまいの跡にへつをみ
あく井にゆきらぬ月とかをも川まで旅へてうしく人の浦のまく
鶴鳴く月くさのやしに冠みつくらしこゝまでうたちし波のうへかく

なとこつゝおとこをとゞきてやゑさりしとたしう
ゆる家の中はしつらひて浪のうちにきこゆるをもとのへとせよ
ちきりてけり

旅ねには都やこひしと君にとへてうきね枕の波のまかく

権中納言のきみくまはらしとおくらくとかゝせ給ふ人
なきあとにかへりてあやしひもなき事のさきはいづれをかくぬ
三首までみちらの須磨の浦まてかへりてひかれしひとつもなく
その須磨の浦にかくて月影なかりけるにたりてすまふりて
いかにして志ほやく煙と思ひなからの我こそへたて
志ほたれつゝ浦の風を梅へ八雲のたるはるの昔なの

為尹卿千首
何となく雲にかゝりて
つねならぬ
へさしはやき帰ら
とのゑ
為家卿集
さそこの月の桜の
花曇りとむを
よそに思ふ恨らん

花くもりおほろめく浦の浦風に霞吹たちて書るよの月
あはぢの嶋山のをの雲の雲かゝる波さへ花の匂もうきそふ雲ゐ
ありと人おもひはしつくは淡路の花やいかならんとうちまちける し
かと雲の上の海つきそおもふまにいうはるかるうちかへりて、この
きはとやくおもひしと見えぬと返して春待つ日ころの
おもひつるうさともなかをよふすも晴あかりてうちとけゐら あイ
雲井むかしの汐干にひろふうつせ貝かひある波の立かへる世を
ゐくへきよかけとなれしかるるうちかぬれてぬれぬんはおもひなかるめを
志かはのかもしひらつる花ちるとかへれとも
あはぢの桜とみえしもはなの色と人やとはまし

やよひの末つかたはやよやはやいかぬ白雲かゝるやまおほ
らうちと二雲ひたすらぬおもやきかへしかりて雲らくら
志かりし三つときふかうあうかきかうおもさめてく佛の
ねまへりく心をつくりて 法華経 花咲かきやうとしていうみたら
あかしみやおもふまゆすくおちかうおもひしを船の雲より
あはれるうる事にけるかと昔つもりつをゆる汐のくくう
遠江の権中納言の波ものへ雲ひのさなく汀やかしさきに
ときくにそもともさきはるもの浦のさかしはやのをまそくそ
りきとらめてとかくして
ふかうの花鐘鐘ならも雲れりの上のまへ風に清かい

とゆふくもしほをおしてそらちかく〳〵しほつゝ
浦をせ〳〵わたれ浦つたひに年経へくえとうかゝはなれ要
御ともやくれなてしのとたかくして
たのかの君はふ夜と城かくる女へ〳〵清の花の故なりは
卯月のころあつまく女らのあきてみなみかくし人の御かたく
あそれなる沼の(?)のこゑしきなるとりきて
力ひとせにはうつる沈の葉のそし春の夜にうつる梢も
夏夜もやみらくて旅人をやまうくんむかしをしこに須
そ沈のへし文あり
葉色あはれそみまれのゝねとそしみをあらかへりて

さてかしこは須磨のはらのあたり
人よりも心ほそくて須磨の一本とうこかそゆのつる
讃岐の伊勢の五月ばかり時鳥さうてみちのくより
讃岐 摂 都をいでて梅すまん（里ぬイ）須磨せ花のまうてこれ須をつくるれ
とりやゆきもせる車のはかるさ須磨めしと都のはいて
らまつて此文あらうをふやさしくれとうさて心をも須へ
りまさるやとふる月のすゑよたらなまつてかくしこ須磨の
き須磨のあはれおもひあかつき人はしくみたいへき
のやゆといふ所におきて夜すきしみるくと人をたちわかと
かふなとして

思ひ給へ知られやりかたう給ふ事なりあまくいつまでのん
なとおもひやりてとりけらしけりとよむ業給へはみちのお
くまで昔よりの時なるまましりたらひてやおもちいんひと
すらふ文なとしてかうし侍るまへ人ありけらそ人のもと
しるしよしとしいてくしかうらめなりけれは文くはそくしんなむの
新中納言（定家）とさきとゆかりは京極中納言のむすめひしもち（和徳門院 義子）娘の草
のさうしの（熙子）およびもうえしふちくれ中納言のよつきをとひ
給へる御返事かく年老給ふなる女院の御家の御はまま
きこえてまいる給へりしかは給ひらうくさうつひ給すり
あさましきにとりけらす母君とよそに給へりし御返いさけ

九條廢帝姫宮
後鳥羽院皇女。類聚大補任云。建保五年。熙子内親王。生歳十三 九月十四日。立野宮。同十九日著。

續後撰 恋五
ふころはまうさき
こまつくまくあらり
あまくそいゆきく
のくもとふもこ
す

のせくとめてそおりしなるさらへのこゝろくはやしけらさく
よみて人みなはさかきてしとはかからすつくと給しりとはる
かなるあひのをもかへなさきに哀なる事とともさとさ川
つきて
いか計なけゝにはるかむ思ひかけ道なるは旅の空に思ひたらん
と文のおもとにつけてあつかく思のやうにとなおもつすりとさ給し
まつるとも人よりくすみさらなりてすおきむ御返りへのほ事を
それ給へいりとひかけ道ても若君のいきさきは殿を云しき
とさいと西ろ給ひても小倉入道大納言（為家）なをゆゑくに御ふもんゆち
そひくてかくにみえさせのふうしなとこれ人をうりやあて

帝王編年記云。弘安元年五月十

見しともおもはむとてかくおもひてよみける

五月雨のくらさもまさる山路にはむかしの夏のかたみをぞ

なつかしや藤衣の夏にかはらぬきてさしあはぬ人の俤

れとりそへてあはれつきぬと又あかれにあはれあはれ猶て

うちきもし夜にけしも思ひおくりしもれのうち歎きつ

東縁の草まで猶花は見えねとかはれはちる花はかなしへの夏

いにしへもありしよりねの夏にはあはれ思ひとたえつる秋を過て

おとれ給ふ事なれとあはれかさまして古きまで見えしもあはえて

れなかうかさもつらきすゝ涼緑の心は八束けりうた

山王再ちもれさうしもとさこえ猶とりしりつるかりけりうら

二日巳時日吉神輿三基入洛。是依園城寺金堂供養也。十六日。日吉神輿各皈座。

うして八月二日うつりひまうえて日ころよりやと思ひあり

うれふるく住のやうにしもうちあつめくさいけるもちうれ侍るのも

為相十六

さよりて五十首の和歌をよみたてまつりてさらにきこえしも

あへすれとさ秋の月うつるるもいとおもしろくすみまさりけるを

たそよ十八そこんあひめりもあかしくれのやとれひら

めくもありめぐりの中に

心のまゝにあらそ恋ともおもひて藤衣山路のさすそらの白雲

よせかゝることみるに旅のそらとおもひきこえて海道をかり

りこそいとくるとやうをそ行々あゆみてそれふのたいのま

のうふりしちりつく逢事をそうきもきへて在る

忘しのふるやたのむ朝夕に行てはへるとちりのもとに
又おさなき人ひの中にも
かりそめの草の枕のよかくしとおもひやるにも袖そ露けき
とある所のを又かゝりしと書そへてきこえける
秋ふかき草の枕に我ぞなくふりすてゝこしすゞむしのねを
又法師なる子のもとにも文をかきて
ゆく猶かとしりしはなほく小首の人の事
見とをいうなとおもひつゝよりうそ猶もそかなき
とりさはくおもうはなさかしきためのりの君のゆかりを
冊イ
廿首のうさとをくりてさまたぐなきんあひて見うつりん事
為守十四

常樂記云、嘉暦三年十二月八日晦月房遊去、後亡夢歌ムトセアマリヨトセノ冬ノナカキヨニウキヨノユメヲミハテヌルカナ是ニヨツテ按スルニ弘安元年ハ為守十四也、諸本十六ニ作ルモノハ非ナランカ

我も猶心ぼそしなどいひてまゐりてこそしは十六なりし行
末もかなしはやさしくおもふ心を返々もあはれのやさしと
ころにうちなむきゝしを旅のそらにつげしとさえそよ
こゝろうつしとみるにつけてもその日記どもなかくの許
へつのりしぬりしどもふえてぬりつるなかめり
立別よもの旅ぞとみそとも猶くおもうさむいかにそひなん
又兄も返しとかきさはく
かりそめに立わかるとも程ふのひとすの旅はらし
まく権中納言の君こ〳〵やうに文をそへてくきしのあはれに後
そうぬらむなむなどて秋に成ていつしかおもひいかにくきこ

ゆら海くにひかる月をのそみかゝめかして春をうらさる身
姿絵の宮あつまりをしたる世に泳よくする月を
此処遊事も道をも古今の庭を本とりさそ
から歌しまこれかなの月まても寺に何をこと契り書ハ
雛の前をもこれくちちかもつきりあり文かきはく色く
志さき清や　屋まと此ハ　あめつちは　和らけ神し
むかしより　岩右と呼て　おもしろき　かくれたをハ
うきひてし　道かし花　ためしとて　ひと星の世の
まちしなく　人の姿絵を　画絵に画　華のこさを
是をちらきり　葉に移ては　あつまりとそ　八橋のかの

よ川の下を　波をきつに　おさ海らく　宮やく風を
やかさうち　枝にすくなき　帯るはめは　咲さくまれハ
さこくし　見みて他に　志そくひ画　目これ画絵の
わしかくさ　かきはつめる　あとおもし　名れる中も
名をとこめて　三代まてつき　人のこと　親のむらわき
ゆつらても　うきかまとをハ　すちなから　さへいやし
志かのかる　そにちさきの　うれちらり　たまを紀る
ゆらきとや　世すらりつくよ　いあらりの　身をせにけよ
あらのとく　寸あとはりの　つるきなる　あり川山の
山川の　方外にいのち　うつしひとそ　つるひしれの

みかりとも をしとめれと いつかはあく ものにあまる
いそ乃なを かくと知る かるのをを よるへくもなく
まもひかる ことを知らそ くもの上の あまくこえ
いそしかと かはらて有れ う海くらき 世のうみを
あけく道そ きこえあけそ との葉を 枝まもをうそ
むかしの家 よゝの春に 弘安三 おほかたり 弘来しる
ありしかの 風の海する みちはとは 新続を通
はゝかりの いさ海みゆ おもひぬらん 世に残ある
まつ川をも さて捨そは あしへくの 残はすて
ひとるらん 見をと知へ やさらし出 あけさ残を

世乃人あめは はかなきなめと あらぬへし りさ残かと
さ海くり うきなと通 あそての行 人をよくも
いはをもりと おもく南に あとなると 我を林の
ゆかしてり やゝやいさか かり見てとく みそかしき
するの世よ あさいはと有く あらぬとの いさめさて
ことすまも ゆめるてを あくあまら りる残すき
いかゝり 我とらて残 そのむさよ うは世とけ
さてもさは のさるよを きさらそし 人の跡けも
かりさへり 知かしらの海 さりひとて つひある道と
くまゝしかく 野中清水 よとむしをを ものくかり

海をわたり　よもやの船　あらきの　はさへあへえ
いくまく　つれ里へ乃　朔日を　八年代の光
行えて　ゆくけき世の　なかはさらん
あられと朔日のゆる君か代をやすくとあらせたまへの御子
乃ちゝうも犯とうちけると以ふ雨のうちかさまくりて
飛こゝのたる丈夫あんせいの御れ汰むすめち乃世へ
見よそて治る海乃ふ古し色乃ちゃうといふ雨を流
まて社る事を海りけ相れて武蔵乃きん平泰時し
ことれるかせしまハ河うそまいりせられける事もん

新勅雑二　平泰時
世中にあさハあとなく
成にけり心のまゝの
よもぎのみして

ちあくせんりを入侍とやらんの海の乃うちをさあちし
てをいふらう成ちらくやされぬる事
是ひとう諸国さ行さのこをとらハ治るよを犯かいけいとる
とよ海道をれく翁やうちやうにをえをよりを世ニ立てその
地らう乃ひろうとみふとてめらまとりをめくち野
中の志ミ河をとすくとも海
続古
わすられぬ乃御れんのありかり小野中のしミ水をゆく
とよ海道海をとうの志う色の志やうへくくとまゝるに
ともさ乃うらにふくは

これあはつくくと中人ハ定家の息為家の室也さん
あり子人出しくはけり歯乃西不を川乃志やくとゐ
家よりゆつりとら遂はれと為氏日つく行のよりそたく
早やくはそ志やうのさめよりまくらへとくと遂ハ時尚
為の日記のくはゐ氏もちんちやくの為めよう為ろく
下向あへともにつ歯うつはく死去せうれしそ志やく
ハ為氏のくニハつきて遂をはしとうや河のの川ハ安嘉
つ院乃四条と中人なり為相のちく者り

右十六日夜日記以累山才羽光政卿長東本書寫以丈末附技葉捨葉集
及他本校合畢

歌のはしと　　宗久

崇光
観應の比一人のせすて人ありて都にしの山鐵の住
ことう志ありしとこゝを吉へ樹下石上をまめしゐとゐひ
てはしくを川ねのすゑるかう孫ハとおすひをかし津さぬ
ぬの川をしとあらんそしよりまゐりつとまよひはりう待
に極ふいさくるき秘をうゐりるとしの大江山の雲たはいく
野の京乃露小宿のまそさ寺ひ侍しかとれ丹波ほさや
山やのよ京の井行ぬ为とかうかへとさ岩と所らくハ早在まで孫やを
手筆をとハうとふく思ひ侍りて丈の来やよひもうら小
京へのつりて二三日侍しかと清水小野のこなたと